

小児期の機能的顎偏位症例に対する咬合管理



小川矯正歯科（広島県福山市） 小川 晴也

略 歴

1986年 大阪歯科大学卒業 歯科補綴学第二講座入局（研修生／1987年 退局）
1987年 大阪歯科大学大学院入学（歯科矯正学専攻／1991年 修了）
1991年 小川矯正歯科開設（福山市元町／1998年 現在の福山市伏見町に移転）
1992年 日本矯正歯科学会認定医
1995年 大連医科大学（中国）客座副教授（至2000年）
1999年 MOrth RCSEd（英国矯正歯科認定医試験）合格
2006年 日本矯正歯科学会 第1回専門医審査合格
WSLO（World Society of Lingual Orthodontics）認定医
筒井塾咬合療法研究会インストラクター（至現在）
2008年 アレキサンダー研究会世話人代表（至2009年）

機能的顎偏位症例は、機能的要素に関わる後天的原因とすでに体の骨組みとして決定づけられている先天的原因が合わさり存在することが知られています。そしてその機能的要素のひとつに上下の歯の干渉が挙げられますが、この歯の干渉が習慣的な態癖によっても引き起こされることは近年の一般臨床において重要視されていないように思われます。習慣的な態癖が歯列や顔面の形態を歪めることを示唆した多数の報告の他、頻繁かつ繰り返し行われる習慣的な態癖が成長期の顎骨の成長要素へ悪影響を与えて顎の偏位や変形を引き起こす可能性を示唆した報告も行われており、小児期における機能的偏位を放置することにより患者本来の成長パターンが狂わされ、さらに成長にともなう骨格的偏位が増悪されることが予想されます。したがって小児患者本来の形態ならびに当該の機能的顎偏位の治療に際しては、矯正歯科医と小児歯科医が病因論の立場から診断と咬合管理を行うという共通の認識を持ちながら上手く連携を行うことも重要であると考えています。

さまざまな性格の患者の理解を得るとともにモチベーションが下がらないような啓発と指導を続けることは患者にもスタッフにも労力がかかることです。しかし種々の習癖を改善し、「本来の自分自身の形態に近づきたい」という患者の奮起を促すためには、いかに患者を感動させ、やる気を起こさせるきっかけとなる説明ができるかどうかとも重要であると考えています。そのため初診時から矯正開始までの間、さらに矯正治療中の各ステージにおける当該患者説明用の写真記録とその膨大な写真データの整理方法にも配慮が必要であると思われま

す。種々多様な診療スタンスがあろうかと存じますが、今回の機会が明日からの臨床のお役に立てば幸いです。